

メディア批評

神保太郎

新型コロナウイルスが猛威をふるっている。ダイヤモンド・プリンセス号では「封じ込め」どころか、医療者も含めた集団感染へと発展。機能不全を起こしているのは、対策にあたるこの国の政治、行政のありようではないか。そして、またメディアも？

連載 第148回

(1) コロナウイルスだけでない感染列島

(2) 官邸番記者たちの望月批判——得をするのは誰か

世界 SEKAI 2020.4

① コロナウイルスだけでない感染列島

■フーコー再読

まさか、本棚からこんな古い本を引っ張り出して読むことになろうとは。埃まみれのミシェル・フーコーの本。巨人フーコーの業績には、古く学生時代から畏敬のまなざしを送るばかりだったが、今、目の前で起きている新型コロナウイルスをめぐる社会的混乱を見ていて、なぜか読み直すべきだと強迫観念に襲われたのだ。

フーコーが著述において、病者や貧者、狂人、犯罪者といった社会の構成員が、施療院、病院、監獄などに収容され、共同体から隔離・排除された歴史の変遷を詳述していた記憶があった。西欧においては、一八世紀に「医学」概念の変化が起きて「健康保全の政治」が登場してきた、と。

「医療はもはや、集合体が無関心ではあり得ない諸個人の生と死における、重要な技術にとどまらない。医療はさらに、全体にかかわる諸決定の枠のなかで、集合体の維持と発展にとって本質的な一要素となるのである」（フーコー「健康が語る権力」）

医療の国家化。行政権力に組み込まれた医療は、健康な人間とは何かを規定し、さらに一九世紀に入ると「正常—異常」の対立軸が形成され、病気に対する見方の基本的な枠組みとなった。狂人たちを運搬したというヒエロニムス・

くとかいうレベルではない。違法ではないか。こんな異常事態に、政治部の記者たちはいったい何をしているのか。法務省担当、検察担当の社会部記者たちは何をしているのか。IR疑惑やゴーン・ネタをもらうために沈黙しているのか。筆者は吐き気を催し、いったん口に戻した吐瀉物（としゃぶつ）をどこに吐き出そうか迷っている。かつて一九九二年に東京地検が金丸疑惑を略式起訴、罰金刑で済まそうとした際に、ペンキをぶちまけられた検察庁の表札にか。

②

官邸番記者たちの望月批判

得をするのは誰か

菅義偉官房長官への厳しい質問で知られる東京新聞社会部の望月衣塑子記者が、菅官房長官を担当する他紙の「番記者」からの批判にさらされている。望月記者が「番記者たちが（記者会見で）指させないと内々で決めた」とツイートした内容をめぐり、『毎日新聞』デジタル版が二月六日に「事実と反する」と批判する記事を配信。『産経新聞』もほぼ同趣旨の記事を二月一四日付朝刊に掲載した。

望月記者批判を繰り返してきた『産経』ではなく、どちらかと言えば、安全保障や憲法改正、原発政策で『東京』と論調が近い『毎日』が口火を切ったことに意外に思った人たちは少なくなかったようだ。記者個人のツイートに対して全国紙が批判記事を掲げるのは極めて異例だ。官邸内

で何が起きたのか。

『毎日』と『産経』が問題視した望月記者のツイートは、一月二九日午後投稿された。

〈先週菅官房長官に抗議して以降、三回連続で指されず。なんと番記者たちが「望月が手を挙げて指させない」と内々で決めたとの情報が届いた。長官が他の記者を指名し続け時間切れとなり、上村報道室長の発言を受けた幹事社が会見を打ち切れれば、特定の記者を排除できる。今後のやりとりを注視したい〉

望月記者にしてみれば、記者としての大切な「武器」を奪われるようなものだ。一月は一四回参加し、菅長官から指名されたのは、たった二回で計三問。望月記者だけ指されないことも五回あったらしい。

これに対して、『毎日』の秋山信一氏（番記者）は「事実に基づかない情報を発信した。特定の記者を『指させない』と決めたり、話し合ったりしたことは一切ない」、『産経』の大島悠亮氏（同）も「番記者の間でそのような『決めごと』を内々で話し合ったり、決定した事実は断じてない」とツイートの内容を全否定する記事を出し、両紙（氏）ともこのツイートの削除を求めている。特に秋山氏は、「内閣記者会側に望月氏からの事実確認はなかった。記者としての基本動作を怠ったまま発信したようだ」「言わず